

恐れることはない

ヨハネの福音書 6章 16-21 節

はじめに

今日の聖書箇所には、イエス様が湖の上を歩くという不思議な奇跡が書かれています。

イエス様は、五千人の人々を、五つのパンと二匹の魚だけで、満腹にされるという奇跡をされました。すると見ていた人々は、イエス様を自分たちの王にするために連れて行こうとしました。しかしイエス様は、それを望まず、ただ一人で山に退かれたのです。

同じ出来事が書かれているマタイの福音書やマルコの福音書を見ると、イエス様は「祈るため」に山に登られたとあります（マタイ 14：23、マルコ 6：46）。イエス様は、人々の期待に呑み込まれてしまうのではなく、神様の前に祈り、自分の使命は何か、自分のやるべきことは何かを静かに確認されたのかもしれませんが。また、集まった五千人の人々のために祈ったのかもしれませんが。また弟子たちのために祈ったのかもしれませんが。いずれにしてもイエス様は、五千人もの人に囲まれる喧騒の中から、ただ一人になって神様との静かな祈りの交わりの中へと入っていかれたのです。

1. イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった

イエス様がまだ山の上で祈っておられる時、「**弟子たちは湖畔に下りて行って、舟に乗り込み、カペナウムの方へと湖を渡って行った**」のです。弟子たちは、イエス様を置いて、舟で湖を渡って行くのです。17 節にはっきりと、「**イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった**」とあります。弟子たちはなぜ、イエス様を置いて、舟で湖を渡って行ったのでしょうか。マタイの福音書やマルコの福音書を見ると、イエス様が弟子たちを無理やり舟に乗り込ませて、自分より先に向こう岸に向かわせた（マタイ 14：22、マルコ 6：45）とあります。つまり、弟子たちが勝手にイエス様を置いて向こう岸に出発したのではなく、イエス様が無理やり弟子たちだけを向こう岸に出発させたのです。

といっても、弟子たちの中には漁師がいました。ペテロとアンデレ、ヤコブとヨハネは、このガリラヤ湖の漁師でした。ですから彼らにとっては、慣れた職場でした。イエス様がいなくても、舟で向こう岸に渡ることは、いつものことでした。しかし問題は、舟を漕ぎ出した時間帯です。彼らが舟を漕ぎ出したのは、すでにあたりが暗くなった「**夕方**」でした。彼らは暗闇の中で、湖の向こう岸に渡って行かなければならなかったのです。

2. 強風の中、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られた

すると不運にも、その日のガリラヤ湖は大荒れでした。強風が吹いて湖は荒れに荒れてい

たのです。18節に出てくる「**荒れ始めた**」という言葉は、「目を覚ます」「覚醒する」という意味の言葉が使われています。普段は寝ているように穏やかなガリラヤ湖も、この時は覚醒して荒れ狂っていたのです。その強風が追い風ならよいのですが、その時は「向かい風」となって、弟子たちは舟を漕ぎあぐねて悩まされ、なかなか前に進めない状況だったのです。

舟はようやく、「**二十五ないし三十スタディオンほど漕ぎ出した**」時、時間はすでに「夜明け」が近づいた午前3時～6時くらいであったと、マタイの福音書やマルコの福音書に書かれています（マタイ14:25、マルコ6:48）。「二十五ないし三十スタディオン」とは、新改訳聖書の脚注を見ると、「四ないし五キロメートルほど」とあります。4～5kmをもし徒歩で歩けば、1時間～1時間30分程度で行けます。しかし弟子たちは、夕方に出発して、夜明けになってもまだ4～5kmしか進んでいなかったのです。つまり徒歩なら1時間～1時間30分程度で行ける距離を、10～12時間かけて舟を漕ぎ続けていたのです。いかに強風が激しかったかが分かります。それと同時に、舟を漕ぎ続けていた弟子たちは、どんなに疲れ切っていたことでしょうか。またそれが真夜中の暗闇での出来事だったので、どんなに心細く、不安だったことでしょうか。

3. 「**わたしだ。恐れることはない**」

そのような中で、弟子たちはイエス様の奇跡を見るのです。山で祈っているはずのイエス様が、なんと「**湖の上を歩いて舟に近づいて来られる**」のです。マタイの福音書やマルコの福音書を見ると、弟子たちは最初「幽霊」だと思ったとあります（マタイ14:26、マルコ6:49）。弟子たちは最初、湖の上を歩いて近づいて来られるのが、イエス様だと分からずに恐れたのです。

しかしイエス様は、彼らに近づいてこう言われるのです。「**わたしだ。恐れることはない**」。幽霊だと思って恐れている弟子たちに向かって、「幽霊ではない、わたしだ。だから恐れなくてよい」と言われるのです。しかしイエス様のこの言葉、「わたしだ。恐れることはない」という言葉は、もう一つの意味があります。イエス様がここで、「わたしだ」と言われた言葉は、ギリシヤ語で「エゴー・エイミ」という言葉です。英語で言えば、「I am」で、日本語で直訳すれば、「わたしです」「わたしである」「わたしはある」となります。これは実は神様ご自身の名前でもあります。出エジプト記3:14で、モーセが神様に、神様ご自身の名前を尋ねた時、神様はモーセにこう言われました。「**わたしは『わたしはある』という者である**」。つまり「わたしはある」というのが神様ご自身の名前なのです。それをギリシヤ語に訳すと、「エゴー・エイミ」となるのです。

イエス様はここで、真夜中の湖で強風のためなかなか前に進めず、疲れ切って不安の中にある弟子たちに向かって、「エゴー・エイミ。恐れることはない」と言われたのです。それはつまり、「わたしは神だ。だから恐れることはない」と言われたということなのです。「神であるわたしがあなたがたに近づいて来たのだ。だからもう恐れることはない」ということです。湖の上を歩くというのは、私たち人間には全く不可能なことです。ですからイエス様

をただの人間だと考える人は、この奇跡を信じないでしょう。しかしもしイエス様が神ご自身であるなら、湖の上を歩くこともできるでしょう。神にとって不可能なことは何もないのですから（ルカ 1：37）。湖の上を歩くこともできない神様、できないことが沢山ある神様を、私たちは神様として信じることができるでしょうか。イエス様はここで、「わたしは神だ。だから恐れることはない」と言われるのです。イエス様がもし神様ご自身なのだとしたら、湖の上を歩くことも、いとも簡単にできたでしょう。

ヨハネの福音書は、イエス様の奇跡を「しるし」と表現します。イエス様の奇跡は、ただ人々を驚かすためのものではなく、何かの「霊的な真理」を証している「しるし」なので、ではイエス様のこの湖の上を歩く奇跡は、どんな「霊的な真理」を証しているのでしょうか。それは、イエス様こそ、真の神ご自身であるということを証しているのだと思います。それを弟子たちに証しするための奇跡が、この湖を歩く奇跡なのだと思います。

4. イエスを喜んで迎えると、目的地に着いた

弟子たちは、湖の上を歩いて近づいて来るのが、幽霊ではなくイエス様だと分かると、イエス様を喜んで舟に迎えます。それは同時に、イエス様こそ、真の神ご自身であることを受け入れることを意味します。弟子たちは、イエス様を、真の神ご自身として舟に迎え入れたと同時に、自分たちの心の中にも、イエス様を真の神ご自身として迎え入れたのではないのでしょうか。というのは、私たち日本人には「わたしだ。恐れることはない」と言われただけでは、それが神様の名前だと分からないのですが、旧約聖書に親しんでいるユダヤ人にとっては、「エゴー・エイミ。恐れることはない」と言われれば、それは神様ご自身の名前であり、神様ご自身が語っている、今日の前にいるのが神様ご自身であるということが、すぐに分かったのだと思います。

弟子たちがイエス様を舟に迎え入れると、不思議なことが起こります。21 節を見ると、「すると、舟はすぐに目的地に着いた」とあります。これまで 10～12 時間も必死に漕ぎ続けたにもかかわらず着けなかった目的地に、イエス様を舟に迎え入れた途端に、すぐに目的地に着いたというのです。イエス様を舟に迎え入れた途端に、強風はやんだのでしょうか。マタイの福音書やマルコの福音書には、イエス様が「舟に乗り込まれると、風はやんだ」とあります（マタイ 14：32、マルコ 6：51）。しかしヨハネの福音書には、強風がやんだとは書かれていません。とにかくイエス様を舟に迎え入れると、目的地に着いたということがだけ書かれているのです。強風はやんでいないのかもしれませんが、しかし、イエス様が共にいれば、必ず目的地に辿り着けるといえることが言いたいのかもしれません。

おわりに

さて私たちは、今日の聖書箇所から何を教えられるでしょうか。17 節に、「イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった」とあります。「イエス様がまだ来ていない」、その状況は、イエス様の再臨を待つ私たちの状況と重なるように思います。イエス様は、私たちの

罪のために十字架に架かり、復活し、天に昇り、今は父なる神様の右の座で、私たちのためにとりなしておられます。それは、山に登り、祈っておられるイエス様の姿と重なります。

私たち教会は、地上に残され、目的地を目指して旅をしております。私たちの目的地とは、天国であり、イエス様がこの地上に再び来られる神の国の完成の時です。その旅路は、真夜中の強風の中、湖を漕ぎあぐねている弟子たちの姿と重なります。私たちの歩みは、悪の支配している暗闇を歩むようなものです。また時には、自分の力ではどうすることもできない強風に見舞われます。病気や障がいを抱えたり、家族に問題が起きたり、愛する人を失ったり、経済的な困窮に陥ったり、様々な強風に見舞われます。それらのゆえに、私たちの歩みは、なかなか前に進まないように思える時もあります。しかしイエス様は、必ず近づいて来られるのです。イエス様がこの地上に再び来られる日は、確実に近づいているのです。

そのような中で、私たちにとって大切なことは、「エゴー・エイミ。わたしは神だ。だから恐れることはない」と言われたイエス様を、自分の心の中に迎え入れることです。イエス様を神ご自身と信じて、受け入れることです。そして「恐れることはない」というイエス様の言葉を、神ご自身の言葉として信頼することです。そうすれば、必ず目的地まで辿り着くことができるのです。必ずしも強風はやまないかもしれませんが。しかし神ご自身であるイエス様を信じて、イエス様が私たちと共にいてくだされば、必ず目的地まで辿り着くことができます。

もう一つ、弟子たちの状況と重なるのは、私たちの平日の歩みです。私たちは、日曜日に礼拝に集まって、月曜日から土曜日までそれぞれの歩みをします。私たちは日曜日の礼拝で、祝祷を祈った時から、イエス様にそれぞれの歩みへと送り出されます。それは、イエス様が弟子たちを舟に乗り込ませて、湖へと送り出した姿と重なります。月曜日から土曜日まで、私たちはそれぞれの歩みをします。時には暗闇を経験します。また時には強風を経験します。そしてそれらの影響で、物事がなかなか前に進まないように思えることもしばしばです。弟子たちが4~5 km進んだところで疲れ切ったように、日曜日から4~5日たった木曜日か金曜日には心身ともに疲れ切っているなんてこともあります。しかし、そのような中でこそ、私たちは、「エゴー・エイミ。わたしは神だ。だから恐れることはない」という言葉を、自分の心に受け入れる必要があるのではないのでしょうか。この言葉を自分の心に受け入れる時、私たちは、どんな暗闇の中でも、どんな強風の中でも、どんな前に進めない状況でも、「イエス様が共にいるから大丈夫」と思えるのではないのでしょうか。イエス様ご自身とイエス様の言葉を受け入れる時、私たちは必ず目的地に辿り着くことができます。月曜日から土曜日まで、様々な事があつたとしても、イエス様の言葉を心に握りしめていれば、また日曜日にイエス様とお会いすることができるのです。

「わたしだ。恐れることはない」。この言葉を、いつでも、どこでも、どんな状況の中でも思い出し、抛りすがっていきたいと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生には、暗闇があり、強風があり、なかなか物事が前に進まないような状況がしばしばあります。しかしイエス様は、必ず近づいて来られます。そして、いつでも私たちに、「わたしだ。恐れることはない」と語りかけてくださいます。そして、私たちを目的地へと導いてくださいます。どうかここにいるお一人おひとりが、イエス様を神ご自身として心に迎え入れ、「恐れることはない」という言葉に信頼して、今週も喜びと希望をもって歩むことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。